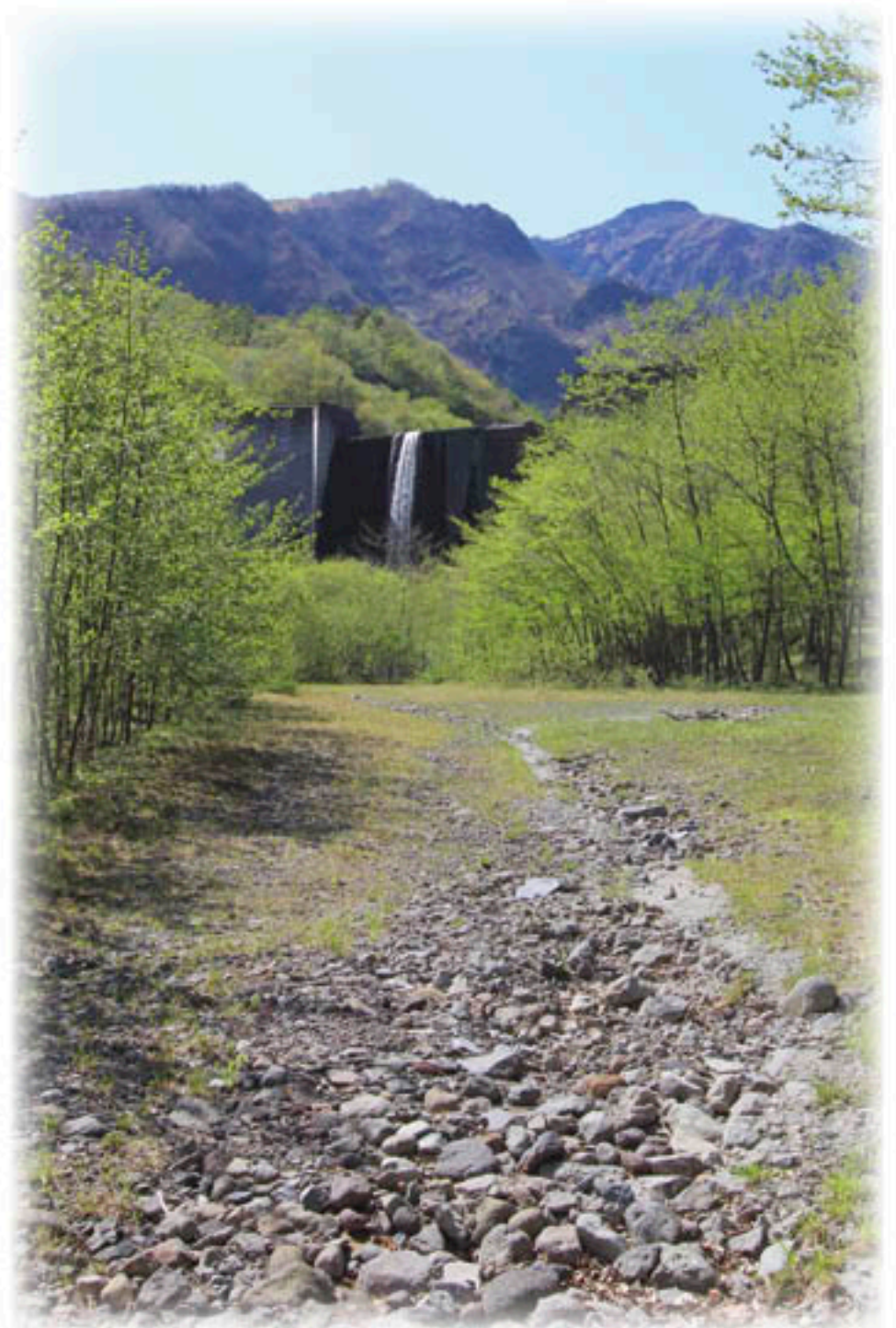


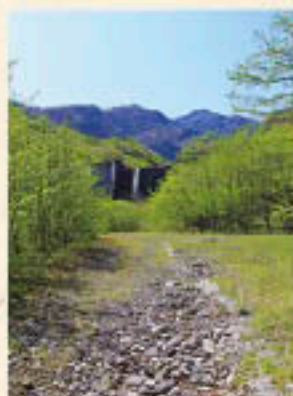
一般社団法人 関東地域づくり協会
(旧 社団法人 関東建設弘済会)

協会だより



第 **1** 号…平成25年7月

- 3 定時総会報告
第1回 定時総会
- 4 理事長あいさつ
- 関東地域づくり協会からのお知らせ**
- 5 千葉県浦安市・市川市と災害協定を締結しました
新役員紹介
新シンボルマーク制定
勤続精励職員表彰
平成25年度 公益事業紹介
- お知らせ**
- 8 圏央道 続々と開通!
蒲田立体ついに完成!
- プロジェクトK⑩**
- 10 砂防堰堤が世界遺産を守る
稲荷川の日向砂防ダムと砂防堰堤群
- 関東ふるさと鉄道⑥**
- 14 上毛電気鉄道 群馬県
- 関東の土木遺産⑩**
- 16 駒沢給水所 東京都
- 会員のひろば**
- 18 人間には九つの穴がある?
“穴の一部ほど武器にもなり最も弱いところなり”
- 会員情報**
- 19 新会員紹介・退職者紹介・お悔やみ
- 20 編集委員会だより



表紙の言葉

八木澤和人氏（関東地域づくり協会技術部）

日向砂防ダム

大谷川との合流点から稲荷川に沿って、登録有形文化財の「釜ヶ沢下流砂防堰堤」を左に見ながら工事用道路を進む。するとそこには、日光の山々をバックに、寒く厳しい長い冬を乗り越えた木々の芽吹きが緑輝く風景がある。その奥で一筋の水を落とす日向砂防ダムが、日光市民の生活と世界遺産（二社一寺）を守っている。

第1回 定時総会



社団法人関東建設弘済会は、平成25年4月1日一般社団法人関東地域づくり協会に移行し、第1回定時総会が平成25年6月6日（木）、大手町サンケイプラザ（東京都千代田区大手町）において開催されました。総会には、会員1,343名中1,132名（出席者432名、委任状提出者700名）が出席しました。

総会は、奥野理事長によるあいさつの後、議事である第1号議案の平成24年度事業報告および決算と会計監査の報告がされ、続いて第2号議案から第5号議案の役員報酬などの額まで審議され承認されました。また、引き続いて平成25年度事業計画および予算などについての報告がありました。

総会終了後、国土交通省関東地方整備局地方事業評価管理官の杉崎光義氏による講演「関東地方整備局の事業概要について」が行われました。杉崎氏からは、関東地方整備局の予算も含め、事業について、河川、道路、砂防、ダム、港湾・空港、国営公園、官庁営繕など幅広いお話をいただきました。その中で、関東地方整備局は、「地域の活力と成長力の強化」と「安全・安心で豊かな社会づくり」の2つの柱で事業を進めること。また、普段あまり聞くことのできない沖ノ島島・南島島に関する事、国際海上コンテナターミ

ナルに関する事、道の駅に関する事、自転車通行環境整備に関する事などの話もしていただきました。さらに、公共事業を広くPRするために新たな試みとして現場のバスツアーを検討していること、事業評価にも力を入れていること、土壌の対処に苦勞していること、防災にはしっかりとした備えをしておかなくてはならなく、活動の記録の取り組みについてもこれから勉強をしていかなければならないことなどの話もありました。その他にも、八ッ場ダム、圏央道等の大規模プロジェクトの紹介もありました。



杉崎光義氏による講演

■1■ 定時総会

理事長あいさつ

奥野晴彦

本日は、皆さまには一般社団法人関東地域づくり協会の第一回定時総会にご出席いただきありがとうございます。

ご案内の通り、当会は4月1日をもって、一般社団法人に移行いたしました。平成21年の総会で一般社団法人移行を決議してから、4年越しの懸案が実現いたしました。この間、平成21年の政権交代、平成22年の発注者支援業務等からの撤退要請等があり、後ほど説明いたしますが、法人移行申請時、あるいは審査時に、これまでの経緯を踏まえた対応を求められ、認可までに時間を要しました。一方平成23年には、東日本大震災が発生し、当会は、災害状況把握、復旧、復興等に際し関東地域だけでなく、東北地域においても全力を挙げて活動いたしました。このことに関し、多方面から感謝状をいただいたことは、当会のノウハウ、技術力が高く評価されたことの結果だと考えております。この経験を大切に、今後の協会活動を今まで以上に積極的に展開する必要を痛感しているところであります。

さて、昨年末再度の政権交代がありました。新政権においては、震災からの復興、経済の立て直しに即座に取り組み、24年度補正予算、25年度予算の編成に合わせ、大胆な金融緩和政策も打ち出されました。今後は、实体经济面での改善が進むよう、補正予算、新年度予算の着実な執行が何をおいても重要と考えます。特に、東日本大震災からの復興を着実に進めることがまず重要です。この震災は、死者15,883名、行方不明者2,676名、未だに避難生活を余儀なくされている方が30万名以上にものぼる未曾有の大災害でした。この復興を着実に進め、被災者の皆さんや被災地の安心、安全を取り戻すことが、元気になる原点であ



ると考えます。

さらに、昨年末笹子トンネルで、天井版の落下により9名の方が亡くなられるという痛ましい事故が発生しました。二度とこのような事故が発生することの無いよう、原因の究明と併せ、老朽化、劣化した社会基盤施設の適切な維持、更新も喫緊の課題です。災害に対する備えを確実なものとし、併せて施設の耐久力を向上させることにより、経済の回復を含む力強い国造りが実現するものと考えます。

このような情勢の下、当協会は今後より一層使命を果たしていかなければなりません。即ち、防災事業をはじめとする公益事業を着実に実施するとともに、地域の基盤施設の適切なマネジメント、人材の育成等を通じた、安全で活力ある地域形成に貢献しなければなりません。一方、発注者支援業務等については、昨年の決議に則り、新会社を設立し、逐次職員と業務を移管していきます。これまで培ったノウハウ、技術力にさらに磨きを加え、質の高いインフラ整備に貢献していきます。

新法人、新会社相まって、これまで以上に地域づくり、国土造りに貢献してまいります。

本日は、協会の今後の運営上の諸課題および、決算、予算のほか、役員改選についてご審議いただきます。また、新会社の概要等についてご報告いたします。

議題が多岐にわたりますが、会員の皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

終わりに、会員の皆さまのますますのご発展とご健勝をお祈りして、冒頭のごあいさつといたします。

千葉県浦安市・市川市と 災害協定を締結しました



浦安市の松崎秀樹市長（左）



市川市の古賀正義危機管理監（左）

平成25年5月31日（金）、関東地域づくり協会は千葉県浦安市・市川市と「大規模災害時等における防災エキスパート支援に関する協定」を締結しました。それぞれ両市において松崎秀樹浦安市市長、古賀正義市川市危機管理監が参加する中、締結式が執り行われ、協定書に調印しました。

今回の災害協定の締結により、関東地域づくり協会は、災害発生時に防災エキスパートを派遣し、災害復旧事業に関する支援を行うこととなります。浦安市、市川市の災害応急・復旧活動が迅速かつ円滑に実施されることが期待されます。

新役員紹介

下記の方々が新役員に就任しました。どうぞよろしくお願いたします。



理事 藤本 貴也

一般社団法人 建設コンサルタンツ協会 副会長



理事 依田 俊治

京王電鉄株式会社 顧問

新シンボルマーク制定

関東地域づくり協会は、新公益法人制度に基づき、一般社団法人への移行および社名変更に伴い新たなシンボルマークを制定しました。

本会は、国土の利用および整備または保全、災害防止、環境に関する事業の円滑な推進を図り、もって国土の健全な発展に寄与するため、関東甲信地方およびその周辺地域において、地域づくりに貢献し社会に信頼され、期待される組織となることを目標としています。シンボルマークは、当会が所掌する地域1都8県を表現しました。

KCKは、関東地域づくり協会の頭文字、K（関東）、C（地域づくり）、K（協会）を表します。



このシンボルマークは、当会長野支部の富林権光さんが作成したデザインに一部修正を加えたものです。

勤続精励職員表彰

関東地域づくり協会表彰規程に基づいた勤続精励表彰式が、平成25年6月18日(火)、本部にて執り行われました。平成25年度は、在職期間が20年に達した5名の方々が対象となりました。

式は、理事長はじめ役員立ち会いのもと東々として表彰状と副賞が手渡され、5名の皆さんは緊張した面持ちで受賞していました。理事長からは「20年という長い間、関東建設弘済会のために努

力されましたことに感謝申し上げます。弘済会はこの4月から関東地域づくり協会へと移行しました。これから地域づくり協会としてしっかりとした基盤を築くことができるかどうかは皆さんの力にかかっています。今後も引き続きの努力をお願いしたい」と、感謝と期待の言葉がありました。受賞者の5名は緊張していましたが、その後の懇談会では穏やかな雰囲気の中で表彰式を終えました。



技術部
浅井 英博さん

このたびは表彰をいただき、誠にありがとうございます。露ヶ浦清水工事事務所での資料整理業務を皮切りに、積算業務や現場技術業務など多様な業務を経験する中で、多くの先輩や仲間、受注先の方々からの叱咤激励

があつたからこそこの表彰だと思えます。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この先、新会社の発足など激動する時代になるかと思いますが、20年の経験を生かし、改めて引き締めたいと思っています。



宇都宮支部
渡辺 利博さん

当に感謝の気持ちでいっぱいです。思い返すと、果たして長かったのか短かったのかよく分かりません。ただ、短気で呑み込みの悪い私が今まで、大きな問

題を起すこともなく勤めさせていただきましたのは、ひとえに上司、同僚、後輩の皆さまのお力添えがあつたからこそです。それからほんのちよつとの家族の支えも、これからのこの表彰を励みとして、当協会の発展のために熱意と努力でタム管理の仕事に没頭していきたいと思えます。



技術部第一積算室
山内 均さん

このたびは20年勤続表彰をいただき、誠にありがとうございます。私が入会が9月でしたので、翌3月までは当時の技術部分室で欠員の交替要員として積算業務をしたり、コンクリート試験室でセメントを練ったり、また八景島駐車場の測量、設計などにも従事させていただきました。20年が経った今、当時に比べだいぶ馬力も落ちてきていますが、これまでの経験を生かして今後も頑張りたいと思います。



高崎支部
河合 幸生さん

相保・鷹原・藤原、現在の品木ダムと、あつたという間の20年でした。弘済会の大きな変革の中で、不安がないと言え

ありませんでした。言ってみれば変化が日常であり、だからこそ日常の中にチャンスがあると気がします。このようなチャンスを与えていただいた弘済会に感謝するとともに、地域づくり協会に少しでも貢献できるように、頑張りたいと思います。



長野支部
小山 和行さん

このたびは勤続精励20年表彰をいただき、誠にありがとうございます。20代から積算技術業務と一つの建設会社では経験できないようなさまざまな工事や職務を経験し、人生において大変勉強させていただいたことに、諸先輩方や業務に関わった

すべての方々に感謝いたします。私事ですが、入会後に誕生した子供が成人を迎えることに月日の早さを実感します。激動の中ではありますが今後也希望を持って精進していきたいと思っています。

平成25年度 公益事業紹介

平成25年3月5日(火)公益助成事業審査会(外部委員2名含む)において
今年度の公益助成事業が前121件審議され、86件が採択されました。

地域活性化

全15件

人口減少、少子高齢化が進む社会の中で衰退している地域社会において、環境保全や観光、文化、歴史、自然等の地域資源を活用する支援を通じて地域づくり、地域活性化に寄与することを目的とする事業。

事業名

- 里山再生を環境学習に活用した持続的
環境保全及び地域活性化
- 中学生体験学習事業(ウッディハウス
建設)
- 道の駅の連携による観光客の集客力
向上活動 他



調査研究・技術開発

全6件

大学・団体・企業等を対象に技術開発・自主研究支援費用の一部の支援、社会資本に関する記録・整理、社会資本の整備に関する研究成果等を活用することにより、広く社会資本の整備の推進に寄与することを目的とする事業。

事業名

- 大谷石採掘後の土地の利活用の研究
- GPS情報に基づくクマタカの生息域
の解明
- 土木遺産保存活用事業 他



防災

全19件

災害時の防災エキスパートおよび当会職員等による災害支援活動および平常時の防災のための公共施設点検、防災意識の向上、啓蒙等の広報活動支援を通じて、災害時の迅速かつ的確な対応に寄与することを目的とする事業。

事業名

- 防災エキスパート支援事業
- 災害復旧事業技術講習会
- 市民防災まちづくり塾 他



講演会等

全9件

河川や道路等の社会資本の整備が防災、治水、利水、物流、観光等地域社会や経済等に果たしている役割等について、講演会やセミナーの開催、優良な工事に対する表彰等を通じ広く理解を深めていただくことを目的とした事業。

事業名

- 災害に関する各種講演会
- 渡良瀬遊水地環境学習講座及びパン
フレット作成
- 建設技術展示館 他



環境保全

全26件

関東地域内に残る自然環境の調査、保護、再生に取り組む活動への支援、河川や道路等の社会資本を清掃・美化する活動への支援、地域の自然に興味を促すことで環境愛護の精神を育む活動への支援を通じ、地域に貢献することを目的とする事業。

事業名

- 「関東・水と緑のネットワーク拠点百選」選定団体支援
- ボランティア・サポート・プログラム
- 江戸川クリーン大作戦 他



広報

全11件

河川や道路等の社会資本について、その役割や重要性などについて、新聞・映画・テレビ・HP等で広報することにより、地域住民等の社会資本への理解を深めていただくことを目的とした事業。

事業名

- 道のある風景写真コンクール
- 渡良瀬遊水地フォトコンテスト
- あがつまの安全を見つめる絵画コン
クール 他



圏央道続々と

国道468号首都圏中央連絡自動車道(圏央道)の下記地点が開通しましたのでお知らせします。

海老名ICから相模原愛川IC間

開通日時：平成25年3月30日(土) 15時
延長：10.1km



相模原愛川IC

茅ヶ崎JCTから寒川北IC間

開通日時：平成24年4月14日(日) 15時
延長：5.1km



寒川北IC



蒲田立体ついに完成!

平成24年12月9日(日)、蒲田立体が開通しました。蒲田立体は、国道15号と環状8号線との交差点である南蒲田交差点を立体化したものです。平行して進められている京浜急行電鉄の連続立体交差事業による踏切の除去と合わせ、蒲田地区の総合的な渋滞を緩和するとともに、新しいまちづくりに貢献します。

(事業区間:約0.98km、立体部:約0.5km)



写真提供：川崎国道事務所

開通!

首都圏中央連絡自動車道(圏央道)は、首都圏の道路交通の円滑化、沿線都市間の連絡強化等を目的とした都心から半径およそ40~60kmの位置に計画されている総延長約300kmの環状の自動車専用道路です。平成25年6月現在、約170kmが開通しています。

今回の開通により、広域ネットワークの形成による通過交通の抑制・分散導入効果や災害時の道路ネットワークの強化、観光の支援、医療圏域の拡大などが期待されます。



東金JCTから木更津東IC間

開通日時: 平成25年4月27日(土) 14時
延長: 42.9km



写真提供: 千葉国道事務所

東金JCT

立体開通2カ月後の交通状況

南蒲田交差点を先頭とする渋滞(朝8時台)

上り線: 開通前170メートル → 開通2カ月後10メートル
 下り線: 開通前20メートル → 開通2カ月後0メートル



砂防堰堤が 世界遺産を守る

稲荷川の日向砂防ダムと砂防堰堤群



弘済会会員の方々に携わったプロジェクトの地を再訪していただき、苦勞や喜び、エピソードさらには事業全体の効果などを語っていただく本シリーズ、第19回は、日光砂防事務所に所属し、稲荷川の土砂災害対策に尽力した高橋秀雄さん、谷田貝光男さんにお話を伺いました。



高橋秀雄さん

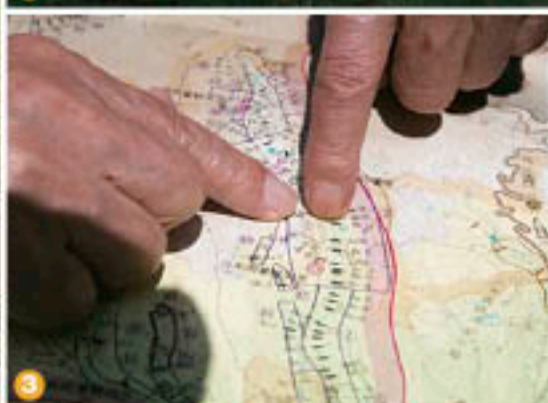
昭和10(1935)年、新潟県生まれ。昭和29(1954)年入省。現在は、防災についての講演などで飛び回っている。NPO法人栃木県防災士会の監事を務める。

谷田貝光男さん

昭和10(1935)年、栃木県生まれ。昭和32(1957)年入省。15年前から冬期は地元の子どもたちにスケートを教えている。日光砂防ボランティア協会の顧問を務める。



① 日向砂防ダムを見下ろす展望台からの眺望。稲荷川の水源地となっているのは、右奥の赤蓮山、左奥の女峰山であり、上流は谷や溪谷が連続する急流河川だ。上流では、現在も崩壊、浸食が続いている



② 日向砂防ダム2回目の着上りは昭和57(1982)年完了。竣工式は同年10月22日。「この砂防が将来にわたって日光、今市の町を守っていくのだと実感しました」と話す高橋さんは、副所長として雑務に駆け回った(『日向砂防ダム工事誌』より)

③ 稲荷川には数多くの砂防堰堤が設置されている

日光の町を 稲荷川の土砂災害から守る

日光東照宮、日光二荒山神社、日光山輪王寺——二社一寺が「日光の社寺」として世界文化遺産に登録されたのは平成11(1999)年である。二社一寺のある一帯は風光明媚な山々に囲まれ、長い歴史と文化の重みを感じさせるが、そこはまた中禅寺湖を水源とする大谷川に、女峰山(2483m)と赤蓮山(2010m)の谷間を水源とする稲荷川が合流する地点でもある。

利根川の支流、鬼怒川の右支川である大谷川とその左支川である稲荷川は、急峻な地形と年間降雨量の多さから、有史以来たびたび大規模な土砂災害を引き起こしてきた。特に稲荷川は流域面積12.4km²、流路延長9.8kmで、川幅は狭く、かなり勾配のきつい急流河川だ。また、今は活動を停止しているが、男体山、女峰山、赤蓮山に代表される日光連山は火山群であり、数千年前の爆発で噴出した硬い溶岩ともろい火山灰が互層に堆積した崩れやすい地質の山々である。女峰山と赤蓮山の間の谷には、「大鹿落とし」と呼ばれる大

規模な崩壊地があり、簡単には人が立ち入ることができない。ここが稲荷川の土砂災害を生み出す最大の難所となっているのである。

記録に残っている中でも、最も被害が大きかったのは寛文2(1662)年の洪水だ。雨が降り続いたために稲荷川上流の水源地付近にできたせき止め湖が決壊。土石流が下流左岸の300あまりの人家を押し流し、死者は140名以上に上った。長雨や大型の台風が襲うたびに、日光、さらに下流の今市の街中は土砂災害の脅威にさらされ、文化遺産や人々の生活を守るために、砂防事業は待ち望まれていたのだ。

明治30(1897)年に砂防法が制定されたのを機に、明治32年から栃木県による5カ年継続の砂防事業が開始。しかし、そこで造られたコンクリートを使わずに石だけを積み空石積の砂防堰堤は、明治35(1902)年9月の足尾台風に伴う暴風雨によりほとんどが流されてしまう。工事規模の大きさや事業の重要性を鑑みて、内務省東京第一土木出張所稲荷川工場(現在の日光砂防事務所)が発足し、国が直轄事業として引き継ぐ形で本格的な稲荷川砂防工事を始めたのは、大正7



④ 2回目の嵩上げ（昭和49年開始）を行う前の日向砂防ダム。昭和39年、台風後の災害復旧工事に谷田貝さんも携わった（『日向砂防ダム工事誌』より）

⑦ 日向砂防ダムの記念碑



⑤ 日向砂防ダムに立つお二人。稲荷川は左奥の溪谷から弯曲して流れて来ており、増水時に押し流されて来た大きな石がごろごろ転がっている

⑥ 日向砂防ダムの天端から下流を望む。すぐ先に鋼製スリット構造の第13堰堤が見える

（1918）年のことだった。以降、稲荷川の下流を中心に数々の砂防堰堤が施工されていく。稲荷川の土砂災害対策において現在も要となっている日向砂防ダムも、昭和3（1928）年に完成した。

暴れる稲荷川を治める要となった日向砂防ダム

高橋秀雄さん、谷田貝光男さんは、共に日光砂防事務所で砂防事業に力を尽くしてきた。

高橋さんは、昭和29（1954）年に日光砂防事務所に入所。日光出張所に配属され、稲荷川の土石流の威力を初めて目の当たりにしたと話す。

「出張所は稲荷川のほとりにあり、私と下岡さんという先輩とで寝泊まりしていたのですが、洪水のたびに地響きがして目が覚めました。川を見ると2mもある大きな転石がぶつかり合って火花が出るんですよ。年に1、2回のことでしたが、恐ろしかったですね」

昭和32年に入所した谷田貝さんは、稲荷川と大谷川の合流地点の近くに実家があり、小さい頃から洪水の被害を目にしていたようだ。

「母が『今日は水が赤いから気をつけな』なんてことを言っていました。大谷川の水は白く濁っていますが、稲荷川が増水して流れ込んでくるときは流れが早く、土砂が混じっているせいで水が赤い。そういうことを母も感覚で理解しているようでした。私が子

供の頃は砂防事業もまだ初期。近所に石工がたくさんおり、仕事に行く姿をよく見かけましたよ」

昭和20年代は稲荷川の上流にはまだあまり堰堤は造られていなかった。そのため、土石流の被害も今よりはずっと多く、日光市の中心部でも橋が渡れず、大谷川の上流方面に大きく迂回し、1時間かけて川を渡ることもあったと二人は振り返る。

高橋さんが最初に携わったのは日向砂防ダムよりも上流の小米平下流砂防堰堤の施工と、さらに上流の早川谷上流砂防堰堤の測量だ。「釜ツ沢砂防堰堤の回りからずっと歩いて上流まで通ったのです。セメントは索道で運搬し、コンクリートに混ぜる管材は現地で砂利を採取しました。その頃は腕に覚えのある職人さんがまだいましたね、“小瀬やん”というおじさんは目地塗りの達人でした」

谷田貝さんの最初の現場は、小米平上流砂防堰堤と、測量した早川谷砂防堰堤への材料運搬道路の施工。「稲荷川の上流では、冬はかなり雪が積もりますから上流で工事の時期は5～11月の間に限られます。12～4月の間は、稲荷川の下流や大谷川の床固めなどの施工を行っていました」

高橋さんも話すとおおり、当時はまだ、工事のために道なき道を切り開いていくような状況だった。「測量のときは、人夫さんと5人ほどでY字峡の回りでキャンプをしたんですよ」と当時を思い返して笑顔を見せ



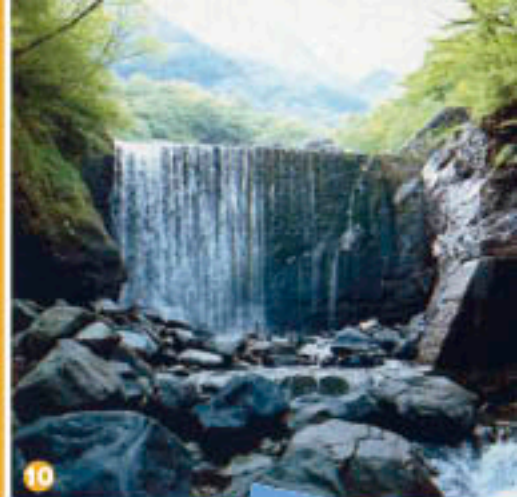
8



9

⑧⑨ かつては、地元で産出する黒丸(くろがらす)と呼ばれる硬い石を割って築石用の石材「間知石(けんちいし)」を整形し、積み上げていった。いずれも専門の職人の仕事だ(パンフレット「登録有形文化財 日光の砂防堰堤」より)

⑩ 日向砂防より上流にある小米平砂防堰堤は、平成15年に登録有形文化財に指定された(パンフレット「登録有形文化財 日光の砂防堰堤」より)



10



11

⑪ 釜ツ沢砂防堰堤(昭和8年完成)は平成14年に登録有形文化財に指定された砂防堰堤の一つ。大正後期から昭和初期に造られた砂防堰堤群も役目を果たしている

⑫ 大雨で山肌が露出した箇所などは土壌の侵食を防止するために山腹工を施工している。こうした継続的な補修が砂防事業には欠かせない



13

るが、相当な道程だっただろう。

砂防堰堤を次々に施工しながら、資材を運ぶための索道やトロッコ、車道などを整備していく。それが次の工事や点検、補修工事の役に立つことになった。

谷田貝さんは、昭和38(1963)年から翌年まで、嵩上げ前の日向砂防ダムで災害復旧工事に携わった。「その頃は直営工事から請負工事への切り替えでね。現場監督として、日向砂防ダムの副堰堤補修や水叩きの新設、下流の第13堰堤、第10堰堤、第2堰堤の補修などを担当しました。材料もだいぶ改良されており、摩耗耐性の高い鉄材コンクリート(ノンシュリンク)を使用するなどの工夫もしました」

この修復を経て、日向砂防ダムが2回目の嵩上げを行うことになったのは昭和49年のことだ。このときは旧ダムを完全に覆う形で、新しく基底から高さ46mの重力式コンクリートダムを建設。貯砂量は大幅に増加したが、今では天端(淵)の際までたまっている。

“造って終わり”ではない

砂防堰堤の役目は、土石流を止め土や砂をためたり、たまった土砂を少しずつ川へ流すだけではない。「砂防堰堤は貯水を目的とする堰堤(ダム)とは異なり、幾つも重ねて造ることではじめて用をなします。一つ造ることで変わった流れと河床の勾配を計算し、しかるべきポイントに次の堰堤を造る。この作業を繰

り返して急流を緩やかにし、河床や川岸が削られるのを防ぐ役目もあるのです」と高橋さんは説明する。

砂防事業は、手間のかかる仕事である。砂防堰堤を造って終わりではない。

たまった土砂は増水時に少しずつ自然に流出するが、あまりすぎた場合はトラックなどで運び出す必要があるし、水や土砂の流れにより堰堤の天端(淵)が削り取られていくため、定期的な補修も必要だ。釜ツ沢砂防堰堤など、まだ堰堤自体を石積みで施工していた時代のものは、昔の姿を生かすということになるとなかなか難しい面もある。

「景観を守ることを考えると、コンクリートで覆ってしまうわけにもいきません。今となっては、もうその頃と同じ石積みができる石工がほとんどいなくなりました。石工を見つけるのはこれからますます大変になるでしょうね」と高橋さん。技術の進歩とともに、失われていったものもあるのだ。

平成14、15年には、大正後期から昭和初期に造られた8つの砂防堰堤が登録有形文化財[※]に選定された。景観を形作っているもの、その後の造形の規範になっているもの、再現するのが難しいものと選定の理由はさまざまだが、いずれにしても先人達が築いた砂防堰堤の基礎が高く評価されたということだろう。それをどのようにして維持し、文化遺産や人々の生活を守っていくか。稲荷川の砂防事業は今も続いている。

※保存および活用についての措置が特に必要とされる文化財建造物を、文部科学大臣が文化財登録簿簿に登録したもの

上毛の山並みに見守られ 8色の電車が走る



上毛電気鉄道

今回のふるさと鉄道は、群馬県前橋市にある中央前橋駅と桐生市の西桐生駅を結ぶ約25.4kmの上毛電気鉄道です。上毛の山並みに見守られながら西桐生の町を目指します。

歴史を感じさせる 85歳のレトロ電車

朝8時。上毛電気鉄道の始発駅である中央前橋駅付近は車や人の往来が激しい。中央前橋駅からJR前橋駅を目指す人も多く、朝のラッシュ時は通勤・通学の乗客で混雑する。

上毛電気鉄道は大正13年に、前橋市と桐生市間ならびに中間地点であった現在の前橋市大胡町から伊勢崎市を経て高崎線本庄駅を結ぶ鉄道として計画された。昭和3年11月に中央前橋から西桐生間が完成した。続けて大胡町から本庄間の工事を進めようとした矢先、不況のため建設資金の調達が困難となり計画は頓挫。営業区間は誕生から85年経った今も変わ

赤城山をバックに走る上毛電鉄
(写真提供：上毛電気鉄道株式会社)



らない。乗客のほとんどが沿線の住人で、地域住民からは“上電”の愛称で親しまれている。

営業開始時に活躍していたのが、昭和3年製造のデハ101、102、103、104の車両だ。残念ながらデハ102と103は廃車となってしまったが、デハ101と104は大胡電車庫に展示されており、101は今でもイベント列車や貸切列車の際に路線を走っている。

101の車内は座席や扉に洋風なデザインが施されていて、なんともレトロな雰囲気がある(地図上写真③)。綺麗に整備された車両からは、社員に大事にされ乗客に愛されている様子が見て取れる。



上毛電鉄は自転車の乗り入れを許可している。夕方の帰宅ラッシュ。車内は学生でいっぱい



乗客と自転車を乗せて 赤城山の麓を走る

現在、路線を走るのは700形の車両だ。京王井の頭線で活躍していた3000系を2両編成に改良したもので、8色8編成が運行している。始発駅で出発を待っていたのは、車体の正面がオレンジ色に塗装された車両だ。いよいよ上電の旅が始まる。

中央前橋駅を出発した列車は住宅街を分け入るように狭い線路を走っていく。上泉駅を過ぎた辺りから景色は一変、車窓に農地が広がり始めた。上電は風を切りながら走る。粕川駅を過ぎると、上毛三山の一つである赤城

山が車窓に飛び込んできた。列車から望む山並みは格別だ。景色に目を奪われていると、女性が自転車を押しながら列車に乗り込んできた。上電は平成15年4月からサイクルトレインを試験的に導入し、2年後に本格的にスタートさせた。乗車運賃のみで自転車を同乗させることができるとあって、年間4万台近くが利用している。

夕方4時。高校生らしき集団が、西桐生駅改札前で折り返し列車の到着を待っていた。駅に着いた列車は数分の休憩を取り、彼らに乗せて中央前橋駅を目指す。15分後、列車は無人駅の新川駅に到着した。学生服を着た乗客が、慣れた様子で運転手に定期券を見せながら降車していく。駐輪場に停めた自転車に乗り家路を急ぐ少年。その姿を横目に、電車は次の停車駅に向かっていった。

大七カケル 用地第一支部 高澤淳次さん

以前、通勤に上電を使っていたので、久しぶりに乗車してとても懐かしく感じました。今回の観光地の中で特に気に入ったのが、大胡電車庫です！デハ101の見学は時間を忘れて楽しんでしまいました。



大胡駅付近を走る上毛電鉄

渋谷町の人々が切望した 町営水道の敷設

東急田園都市線桜新町駅から約5分。まっすぐに伸びる水道道路に立つと、二つの塔の先端が姿を現します。この塔こそ、かつての渋谷町に水を供給するために建てられた駒沢給水所の配水塔です。鉄筋コンクリート製の配水塔は高さ約30m、直径約15m。周囲には12本の付け柱があり、塔の頂きには王冠に見立てた電球が施されています。その一風変わった姿から「丘の上の王冠」、また、同じ形をした塔が二つ並んでいることから「双子の給水塔」と呼ばれ、地域の人々に親しまれてきました（給水塔は俗称であり、正式には配水塔）。

大正初期、豊多摩郡渋谷町（現：渋谷区）は、町内の発展に伴い急激に人口が増加。そのため水不足となり、水の確保が急務の課題となっていました。渋谷町は水の安定供給と衛生面の確保、防火に備えた貯水のために水道の敷設計画を立てたのです。

設計を担当したのは、東京市の水道改良事業など全国の上下水道建設に携わり、日本の近代水道の開祖と称された中島鋭治博士です。駒沢給水所の設計は中島博士の最晩年のものとなりました。

「清冽如鑑」「滾々不盡」 給水所に込められた熱い思い

中島博士の計画は、多摩川河畔の砧村（現：世田谷区鎌田）の地下水を世田谷の高台までポンプで押し上げ、その高低差を利用して自然流下で渋谷町に給水するものでした。その高台が駒沢給水所の所在地です。しかし、渋谷町との標高差はわずか10m。自然流下で渋谷町まで送水するために高度を稼ごうとして、配水塔が建てられたのです。

大正10（1921）年2月、上水道敷設の認可が下り、同年5月には砧村で起工式を挙げました。砧村から渋谷町までの距離は約8500m。国と東京府の財政支出も得ての大工事だったと言われています。

配水塔の竣工が間近に迫った大正12（1923）年9月、関東大震災が発生しましたが、配水塔には被害はなかえってその強固さを示しました。関東大震災の発生からわずか2カ月後に配水塔（今の第一配水塔）が完成。翌大正13年3月に竣工式が行われました。このとき、1号塔には「清冽如鑑（清冽鑑の如し）」、2号塔には「滾々不盡（滾々として盡きず）」という銘板をはめ込みました。人々の期待を背負った関係者の思いがひしひ



関東の土木遺産 第19回

住宅街にそびえる双子の給水塔

駒沢給水所 東京都

駒沢配水塔・第一配水ポンプ所

土木学会では現存する貴重な土木構造物を調査し、「日本の近代土木遺産」として発表しています。



それらの土木遺産の中でも特に価値があるとされるのが選奨土木遺産。関東地方の選奨土木遺産を訪ねての旅。第19回は東京都にある駒沢給水所です。



第一配水ポンプ所と
ポンプ設備



選奨土木遺産
に認定された
駒沢給水所の
配水塔。「双子
の給水塔」と
して親しまれて
いる

しと伝わってきます。

関東大震災以降、給水量がさらに増加するおそれがあったため、渋谷町は設備の増設を計画。昭和6（1931）年ごろに砧浄水場取水施設の改造や、ろ過池の増設などの拡張工事を行い、駒沢給水所には第一配水ポンプ所が新たに建造されました。

給水機能の再生を待ちながら 住民の生活を見守る

駒沢給水所は平成11（1999）年、老朽化などによって一度その任を終えました。取り壊しの計画がありましたが、配水塔の耐震性が確認されたことから活用を再検討し、現在は震災時などに備えて、常時3200m³の水道水を蓄えています。

平成24（2012）年、独創的な意匠と当時の建築技術が残る貴重な建造物であることが評価され、駒沢給水所の配水塔と第一配水ポンプ所が選奨土木遺産に認定されました。

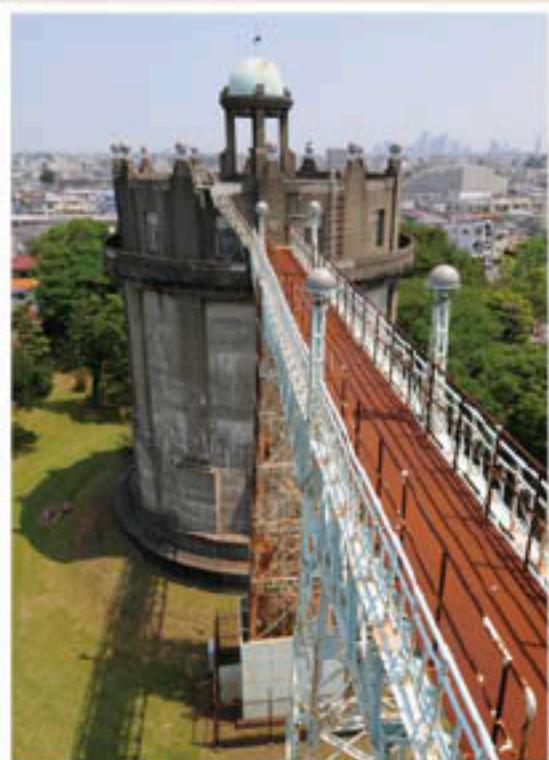
選考委員の二井昭佳国土館大学准教授は「今回の認定が、駒沢給水所への地域の方々の愛着をさらに深めることにつながるとうれしい」と、期待を寄せます。

さらに、認定に至った背景には「駒沢給水塔風景資産保存会（愛称：コマQ）の尽力が大きい」と続けます。

風景資産推薦者の久野富雄さんは選奨土木遺産の認定を受け「非常にうれしい」と笑みを浮かべて一言。「コマQの設立から約10年、東京都水道局や地域住民の方々と協力しながら活動してきました。当会としては、地域の方々や子供たちに、駒沢給水所の歴史や必要性を継承し、どのように残し、いかに活用していくか考えていきたい」と今後の活動にも熱が入ります。

配水塔の独特なデザインについて、会長の澤一郎さんは設計者の中島博士に触れながら次のように解説します。「中島博士は、数度のヨーロッパ留学や視察で多くのインスピレーションを受けたのでしょうか。二つの塔をつなぐトラス橋はエッフェル塔と同じリベット式ですし、モデルはドイツのマンハイムにある給水塔ではないかと考えています」

選奨土木遺産認定書には「独創的な意匠を持つ貴重な土木建造物であり街のシンボルとして地域住民にとって愛着の深い施設である」の一文が記されています。駒沢給水所は街のシンボルとして、これからも住民を見守っていくことでしょう。



二つの配水塔を
つなぐトラス橋

建設途中の配水塔。昭和30年代頃まで世田谷一帯は田畑で「私が小さかった頃は、給水塔はどこからでも見えました」と澤さんは当時を懐かしむ
写真提供：駒沢給水塔風景資産保存会



中島鋭治博士
写真提供：公益社団法人
土木学会

久野富雄さん（左）と
澤 一郎さん



駒沢給水塔風景資産保存会（コマQ）

<http://setagaya.klr.jp/koma-q/>

駒沢給水塔風景資産保存会は平成14（2002）年に設立した地域ボランティア団体です。現在、コマQは東京都水道局の協力を得て、年に1回給水所の見学会を開催しています。近年は、小学3、4年生を対象とした見学会を開き、駒沢給水所が何のためにあるのか、その必要性を継承する活動にも力を入れているそうです。

「私たちの活動は、風景資産の保存から“保存と活用”に変化しています。それには駒沢給水所に興味関心を持ってもらうことが大切。地域住民が参加できるイベントをさらに増やしていきたいと思っています」（澤さん）。

南側の一号塔には「清冽如鑑」。北側の二号塔には「濼々不盡」の銘板がはめ込まれている



会員のひろば

このページは
会員の皆さまの
投稿によるページです



地 健康を考えた地について、 はや30年???

私の子供が小学校の友達と一緒に忍術を習っておりまして、送り迎えをしておりましたとき、先生から「お父さんも忍術を習ってみませんか」との話がありました。結局、父親がハマってしまいました。毎週2~3日稽古に通う日々となりました。そもそもタイミングよく江戸川河川事務所に転勤となりましたので、野田市内にありました道場に夜7~9時までの稽古に毎週通いました。現在も江戸川河川事務所の玄関前にあります「もちの木」に昼休み雨の日以外は木登りをして、上半身と足腰を鍛えておりました。

水 すべて水のごとく 変化して流れる。

私の学んでいる戸隠流忍法体術は、現在34代宗家・初見良昭先生と白石勇先生の指導を受け、心身ともにグッドバランスを得ております。最近やっと、体をムーブして汗を流しくたくたになって初めて、水のごとく変化する良さがわかることに目覚め(見る目ができた)ました。あるとき手裏剣投げを稽古していて倒れるくらいまで行いましたら、体の力が抜けてスッヘトストーンと刺さりました。これだ! と体で感じられたときでした。

火 外国の方々も 烈火のごとく学んでいます。

いろいろな国の方が本部道場に來られますので、世界の動きの香りを嗅ぐことができます。このために、五感の調

練になると感じております。イングランド・スイス・オランダ・フィンランド・ブラジル・カナダ・ドイツ・フランス・オーストラリア・ルーマニア・スウェーデン・イタリア・スペイン・ノルウェー・アメリカ——手まね、足まねで会話して楽しい時間を過ごしております。お土産が届くこともあります。何に使うのか分からない金属の飾り、食べ物ではナッツ類や長期保存できるクッキー類、飲み物は火の出るようなアルコール類など。外国人と交流できる機会がありますので、忍術との出会いが井の中の蛙になることなく私の人生を幅広く楽しいものにしてきております。

風 風のように舞うような 動きをしよう。

日常生活で役に立っていることは沢山あります。たとえば、力を使わずにドアをオープンする。駅の階段は足で上るのではなく膝をあげて上ります。自転車もハンドルに手を添えて、ペダルは足を添えているだけ、右足の重さでペダルを下ろし左足の力を抜く、交互に足の重さでペダルが落ちていく。ぜひ試してみてくださいね。

空 忍術は楽しい生き者!

千変万化にムービングして空を斬る。そのためには準備が必要となります。これは日常生活においても同じではないかと思うようになりました。忍術を通じて生活の千術(智慧)を学び、体で感じて虚と実を自然体で会得することでしょう。

人間には九つの穴がある? “穴の一部ほど武器にもなり 最も弱いところなり”

細田典男

戸隠流忍法 士道師
元関東地方整備局下館河川事務所 副所長



会 員 情 報

平成25年1月1日～
50音順・敬称略

新会員をご紹介します 新しく22名の方が入会されました。これからよろしくお願いいたします。

氏名	所属団体
青山 俊行	(公社) 日本河川協会
秋山 均	(一社) 日本道路建設協会
猪股 純	(株) 本間組
大原 泉	(一財) 全国建設研修センター
菅野 和典	京成建設(株)
木村 義信	(株) 復建エンジニアリング
後藤 敏行	(一社) 関東地域づくり協会
佐藤 穂峰	(株) ギャアート・K
下保 修	(一社) 日本橋梁建設協会
瀬尾 俊男	MMコンサルタント(株)
関根 保弘	(一財) 先端建設技術センター

氏名	所属団体
高木 義和	(株) ドーコン
竹内 義人	(株) 駒井ハルテック
竹元 浩司	中央復建コンサルタンツ(株)
宮岡 秀顕	(一財) 河川情報センター
冨田 衛	(一社) 日本補償コンサルタント協会
羽富 享	(一社) 日本補償コンサルタント協会
藤田 明	大成ロテック(株)
安原 遼	
山本 和志	
吉田 英男	(株) 瀬山コンサルタント
依田 俊治	京王電鉄(株)

職場を去られた方をご紹介します 下記45名の方が職場を去られました。

氏名	勤務先
會田 正	(株) 駒井ハルテック
飯作 了一	(財) 都市緑化技術開発機構
石田 巖	(一財) 公共用地補償機構
牛澤 嗣雄	(株) 小池組
尾崎 昌夫	(社) 関東建設弘済会
男澤 和博	(株) エム・テック
大日方 勲	エムシー産業(株)
大日方文博	大日本土木(株)
片野 幸雄	岩井建設(株)
川島 美治	(株) ノバック
木下 英俊	三井共同建設コンサルタント(株)
小林 俊三	(株) カタヤマ
小林 弘幸	(社) 関東建設弘済会
小松 捷	(株) IHI インフラ建設
齋田 長薫	大和測量設計(株)
佐川 利夫	防災工業(株)
佐藤 和雄	(株) 労働者健康福祉機構
佐藤 敏明	(財) 駐車場整備推進機構
設楽 武久	岩田地産建設(株)
島村 良和	石川建設(株)
杉山 好信	SEEE 協会
住吉 忠	秩父産業(株)
高橋 徹	(社) 関東建設弘済会

氏名	勤務先
多賀 芳治	日本振興(株)
谷本 修志	GET ワールド(株)
永井 春夫	(株) アイ・ディー・イー
中嶋 孝	プロファ設計(株)
中村 節男	(株) 用地・環境調査センター
西田 一孝	共和コンクリート工業(株)
西村 亮男	(社) 関東建設弘済会
野口 健	(株) 東京建設コンサルタント
橋本 正一	(株) アイ・ディー・イー
羽鳥 碩也	(社) 関東建設弘済会
早川 徳一郎	(株) 林土木
原 秀夫	(株) 地域総合リサーチ
藤崎 利雄	倉瀬建設コンサルタント(株)
堀内 龍雄	(社) 山梨県河川防災センター
増沢 武	矢木コーポレーション(株)
宮原 正廣	(社) 関東建設弘済会
宮本 俣彦	(一財) 全国建設研修センター
八木橋啓二	(社) 関東建設弘済会
山口 高志	(株) 東京建設コンサルタント
山田 忠行	(株) 岡部工務店
山名 至孝	(株) 日立テクノロジーアンドサービス
横倉 勇	(株) 関電工

お悔やみ申し上げます 8名の方々に心からご冥福をお祈り申し上げます。

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省) 退職時職名	氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省) 退職時職名
中村 末夫	平成25年1月	利根川下流河川 副所長	藤原 秀夫	平成25年5月	
坪田 英明	平成25年1月	関東地整 常務部長	飯田 敏雄	平成25年5月	東京国道 総務課長
山本 亮一	平成25年2月	関東地整 福利厚生官	関 林三	平成25年5月	下総河川 副所長
中尾 一典	平成25年3月	水資源開発公団 関西支社長	櫻井 昭一	平成25年5月	河川部 水政調整官

編集委員会だより

2013年7月

→ 一般社団法人 関東地域づくり協会が平成25年4月1日に船出をいたしました。一般社団法人への移行に伴い、名称も「社団法人 関東建設弘済会」から「一般社団法人 関東地域づくり協会」へ、「関東弘済会だより」も「協会だより 第1号」へと変わりました。

「協会だより」になって、内容一新とはいきませんが、読者の皆さま方へさまざまな情報を発信できるように、編集委員一同知恵を絞り充実した広報紙にしていきたいと思っております。

また、会員の皆さまからの寄稿をお待ちしております。趣味・特技など「会員のひろば」に掲載させていただきたいので、よろしくお願いたします。 編集委員 Y・I

編集委員

● [関東地域づくり協会]
飯田芳夫・刈部和人
磯引繁雄・高橋順一
高橋芳子・仲川博雄
八木澤和人
[会員]
小林豊 ((株)大本組)
横山真大 (大成建設(株))